

言語進化におけるコミュニケーションと思考 —意味的普遍性と言語多様性をめぐって¹—

守田 貴弘*

1. 導入

言語学において、言語の起源と普遍言語をめぐる議論はこの150年間、禁じられてきた。よく知られている通り、これは1866年にパリ言語学会 (Société de Linguistique de Paris) がこの2つのテーマの発表を受け付けないことを定めた影響であり、言語学という学問の中では、言語の起源や進化といった問題は扱われないまま時が流れた²。ところが1990年代以降、言語起源あるいは言語進化をめぐる議論が言語学の外部から活発になってきている。生物学、脳科学、考古学などを含んだ超学際的な学会としてEvoLangが発足し³、その中で生成文法を理論的支柱とする一部の言語学者も起源をめぐる研究に参入し、生物言語学が提唱されるようにもなっている。言語学からこの分野に参入しているのはごく一部の生成文法の論者にほとんど限定されてはいるものの⁴、極小主義プログラム (Minimalist Program) を軸として、その他の分野と協働しながら言語の進化に迫ろうという生物言語学の動きが活発になっており、局所的にはあるが、言語進化をめぐる状況は変わってきていると言うことができる。

言語学の問題として言語進化を扱うとき、言語の機能をめぐる古典的な対立が今も引き継がれていると見ることができる。すなわち、「言語とは何か」という大きな問いに対する、「思考のツールである」とする立場と、「コミュニケーションのツールである」とする立場の対立である。

言語は思考を表出するためのシステムであって、(コミュニケーションのシステムとは) まったく異なったものである。もちろん、言語をコミュニケーションのために使用することはできるが、(...) コミュニケーションは言語の唯一の機能ではないのであって、それどころか、言語の機能と本性とを理解することに益する独特な意義も一切ないようにさえ思われる (Chomsky 2002: 76-77、訳文は大石・豊島 (2008: 88-89) にしたがう。括弧内は筆者)。

* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学経済学部

言語は、思考の道具として進化したのか、社会的コミュニケーションの道具として進化したのか、という問題をたてることができる。言語学を中心とする研究者の中には、思考の道具として進化したという仮説をとる人々もいる。しかし、筆者は、霊長類全体の脳の進化を説明する社会脳仮説から出発して、思考の道具仮説をしりぞけ、「言語はそもそも社会的コミュニケーションの手段として進化した」という仮説の上に考えを進めたい（長谷川 2010：167）。

1つ目の引用に見られる通り、生物言語学による進化のシナリオでは複雑な思考を構成することが言語の基本的機能であるとされる（cf. Chomsky 2002, 2007, Berwick 2011, Berwick & Chomsky 2011, Fujita 2009、藤田 2012 など）。その一方、行動生態学や発達心理学、語用論や言語行為論といった機能主義的言語学を取り入れた認知科学的な立場では、言語以前に十全な社会的・協力的なコミュニケーションが行われており、その上に音声加わることによって言語が発生したというシナリオが描かれている（cf. Tomasello 2008, 2014, Scott-Phillips 2014）。それぞれの主張の詳細については次節から検討していくことにし、ここではまず、上記を踏まえて本稿の目的を明らかにしておくことにしよう。

上の引用にもあるように、一見したところ、言語進化におけるコミュニケーションの役割をめぐっては、2つの立場は真っ向から対立しているように見える。それに対し、本稿の目的は「言語の本質的機能は思考の表出である」とする生物言語学の主張を批判的に検討し、以下2点の分析を通してコミュニケーションが二次的な機能ではないことを主張することである。すなわち、(i) 「言語の本質的機能はコミュニケーションなのか、思考なのか」という問いの立て方自体に問題があり、これらの立場は相対するものではなく、進化上の別々の段階における異なる側面を強調しているに過ぎないため、コミュニケーションにも一定の役割があると考えられること、そして (ii) 言語の統語性や構成性について生物言語学は非常に強い説明力を持っている一方で、恣意性や超越性といったその他の必須の性質、あるいは言語相対性仮説や意味的多様性を視野に入れるとき、コミュニケーションが必須であることを示す必要性があることである。

実のところ、上の引用に現れる「言語」や「コミュニケーション」といった用語が指しているものを明らかにしなければ、どこに対立点があるのかも明確ではない。言語が今のような複雑なシステムとなる前は、比較的単純な構造の原型言語（proto language）があったと想定する研究者は多く⁵、動物の間にコミュニケーションがあることを否定する人もいない。原型言語から現在の人間言語へという進化の中で「どのような（原型言語から人間言語への）変化があったのか」、「言語が発生することで、どのようにコミュニケーションが変化したのか」という点が問われなければ、何が対立しているのかも明らかではないということである。さらに、いずれかの立場が有力であると判断するにせよ、相補うものであることが判明するにせよ、現時点で妥当だと考えられる進化のシナリオは、6000 から7000と言われる言語多様性や、弱い仮説として知られる言語相対性仮説とも整合的である方が望ましい。そのためには、文化集団ごとのコミュニケーションという側面も、決して無視することがで

きないはずである。

以下、第2節では、現状の議論で使われている「言語」や「思考」、「コミュニケーション」という用語が指す概念を精査することで、これらの用語が進化の過程における別々の発達段階において異なるものを指しており、生物言語学とコミュニケーションを重視する立場が必ずしも対立するものではないことを論じる。人間言語が発生する以前と以後で思考とコミュニケーションがどのように変化したのかという点に注目し、言語の発生によって複雑な階層構造を持った思考が可能となったこと、そして、その複雑さが適応となる程度にはコミュニケーションも複雑化していたことが想定されることを主張する。言語が思考のため／コミュニケーションのために進化したという二分法は問いの形として決して妥当ではないことを示す。第3節では、生物言語学で想定されている言語進化のシステム自体を検討していく。確かに、生物言語学で想定されている併合（Merge）という操作は複雑な階層構造を発生させる装置として強い説得力が持つ。しかし、言語が備えるべき条件の一つとして恣意性を考慮したとき、さらには、言語相対性仮説が部分的に実証されている現状に立ち返って考えたとき、強力な意味的普遍性を前提とする生物言語学の概念意図システム（Conceptual-Intentional System）には問題が含まれていることを議論する。併合が可能になることが言語にとって極めて重要であるのと同じように、言語が満たすべきさまざまな性質を平等に評価するとき、生物言語学における感覚運動システム（Sensor-Motor System）を介した外在化というプロセスもまた、言語が発生する上で必須であり、二次的なものだとは考えられないことを主張する。

2. 進化におけるコミュニケーション

2.1 コミュニケーションに対する2つの方向性

生物学ではふつう、進化を考えるときには目的論的（teleologic）に進化が起こるという考え方は採用されない。キリンは高いところにある食物を摂取するために首を伸ばしたわけではなく、長い首が生存上、有利に働いたという理解が一般的である（＝適応）。したがって、言語の進化を生物としての形質発現と捉えるとき、コミュニケーションであれ思考であれ、いずれかを目的として言語が発生したと考えるのではなく、ある性質が先行して発現しており（＝前適応）、それが前駆体となって別の性質を獲得するために有利に作用する、あるいは別の機能に転用される（＝外適応）といった考え方をとることになる。したがって、第1節の引用に見られるような「思考を表出するためのシステム」「言語はコミュニケーションの手段として進化した」といった説明も、目的論的に解釈できそうではあるが、言語の基本的機能は何なのかという問いに対する答えとして捉える必要がある。

議論を先に進める前に、本稿におけるコミュニケーションの定義をはっきりさせておこう。コミュニケーションは、言語学だけではなく、生物学や情報学においてもさまざまに定義されている概念である。言語学の領域においては、たとえば池内（2010）は「話し手と聞き手との間でことばによる情報や意思の伝達・交換が行われ、それによって相互理解・共通理解がなされる、あるいは図られること」（池内 2010：144）と定義している。過不足ない定義であり、直観的にも妥当だと思われるが、

これはあくまで言語を使ったコミュニケーションの定義であるため、言語発生以前のことも含めて考えるには狭すぎる。言語以前の状態を考えて、ここでは生物学などで採用されている「他個体の感覚器官に働きかけることでその行動を変えること」(藪田 2010 : 12) あるいは「発信者が受信者の行動に影響を与えることにより、結果的に利益を得るような、動物どうしの信号の伝達」(岡ノ谷 2007 : 186) と考えることにする。つまり、発信者の信号によって受信者が影響を受け、発信者にとって何らかの利益に結びつく行為として捉えるということである。

さて、コミュニケーションをこのように定義した上で、言語進化におけるコミュニケーションの位置づけを検討していくことにしよう。第1節で提示したように、表面的には真っ向から対立する2つの立場があるように見えるわけだが、まずは生成文法学者として生物言語学にコミットしている研究者の見解から見ていくことにしよう。「言語学を中心とする研究者の中には、思考の道具として進化したという仮説をとる人々もいる」(長谷川 2010 : 167) として指されているのはこのような立場の意見であり、以下の引用にその立場を鮮明に読み取ることができる。

Language can of course be used for communication, as can any aspect of what we do : style of dress, gesture, and so on. And it can be and commonly is used for much else. Statistically speaking, for whatever that is worth, the overwhelming use of language is internal – for thought. It takes an enormous act of will to keep from talking to oneself in every walking moment – and asleep as well, often a considerable annoyance. The distinguished neurologist Harry Jerison (1973 : 55) among others expressed a strongest view, holding that “language did not evolve as a communication system...the initial evolution of language is more likely to have been...for the construction of a real world,” as a “tool for thought” (Berwick and Chomsky 2011 : 25-26).

言語の適応的機能を論じただけの疑似説明が多々見られるが、それらは「言語が可能にしたもの」を「言語を可能にしたもの」と混同し、進化の因果関係を逆転させるものである。「言語はコミュニケーションのために進化した」という言説は、その疑似説明の典型であるが、言語機能の仕組みを理解すれば、そういった見方が支持し難いものであることが明らかになってくる(藤田 2009 : 100、傍点は原文)。

Berwick and Chomsky (2011) では、ハリー・ジェリソンの引用も含めて「思考のツール」という考えが明確に表明されている。これだけでは、根拠のない、単なる立場の表明に過ぎないものとすることもできるが、実際にはそうではない。藤田 (2009) が明確に述べているように、また第1節に引用した Chomsky (2002) にもあるように、コミュニケーションは言語があってもなくても可能であり、「言語によって可能になった言語コミュニケーション」を進化の目的として語ることを戒めているものとして捉えることができる。

実際、藤田（2015）は、「コミュニケーションがあったから言語が可能になったのか、言語が発生したからコミュニケーションが可能になったのか」という問いに対して、図1のように答えている。



図1 コミュニケーションと言語の発生

言語の発生以前にもコミュニケーションは行われており、人間以外の動物の世界にもコミュニケーションはある。そのため、言語の発生によって、前言語コミュニケーションから言語コミュニケーションに変わったということ以外に答えはないことになる。その上で、言語の発生に関しては前駆体となる何らかの特徴が適応だった、あるいは外適応されたと見るべきであり、それがコミュニケーションだとは考えられないと主張する。そしてこの主張はそのまま、言語が備えた重要な性質（＝生物言語学にとってはすなわち「回帰」（recursion）のこと。2.2参照）にとってコミュニケーションが果たす独特の意義はないという主張にもつながっている。確かに、他の動物も非言語コミュニケーションは行う。エサを見つけたスズメが鳴き、そのことによって他の個体が集ってくる（cf. Elgar 1986）。ワオキツネザルがある種の警戒音を発することで、木に上って逃げたり、茂みに隠れたりもする（cf. 小田 1999）。定義に照らして考えるならば、捕食中に外敵を警戒する「目」を増やすといった効果や仲間の生存確率が高まるという利点もあるため、これらは立派なコミュニケーションであり、かつ言語を必要としていない。

さらに藤田（2015）は、言語と言語コミュニケーション、あるいは言語進化と言語コミュニケーションの進化を混同してはならないとした上で、3つのコミュニケーションの誤謬を挙げている。

- a. Language evolved for the purpose of communication（言語はコミュニケーション目的で進化した）
- b. Language is the major tool of communication（言語はコミュニケーションの主要なツールである）
- c. Language/language evolution can be understood in terms of communication alone（言語／言語進化はコミュニケーションだけで理解することができる）

これらは確かに誤謬である。前述の通り、(a)については他の動物のコミュニケーションから言語が育っていないという事実がある。また、(a)が誤謬なのであれば、(c)も維持することはできない。(b)についても、コミュニケーション論やジェスチャー研究によれば、コミュニケーションが言語だけで成立しているわけではなく、非言語行動もコミュニケーションの重要な一端を担っていることは一般にも広く知られているところである（トーンや表情などの重要性を主張した初期の研究としては Mehrabian 1971、言語に付随するジェスチャーについては McNeill 2008などを参照）。

このように考えると、言語に対してコミュニケーションが果たす役割は何もないと思えるかもしれない。しかし、図1ならびに3つの誤謬に関して注意しなければならない点が2つある。1つは言語の発生以前と以後で、コミュニケーションがどのように変質したのかという点について、この図式では明らかではないという問題である。前言語段階でも言語発生後の段階でも、コミュニケーションが

行われていることは間違いない。では、言語が加わることで何が変わったのだろうか。これについては2.3節で改めて検討することにしよう。

もう1つは、コミュニケーションを重視する立場であっても (cf. 長谷川 2010、小田 2009、Tomasello 2014, Scott-Phillips 2014 など)、誤謬 (c) にあるような、言語や言語進化はコミュニケーションだけで理解することができるといった極端な主張をしているとは考えられないということである。むしろ、ヒトだけが言語を持ちえた事実から出発し、言語を獲得する以前の段階において、他の動物とは異なる人間コミュニケーションがあったということが重視されている。たとえば、藪田 (2010) は、受信者の反応を効率よく引き出すためには、受信者の意図を読むことが役に立つことを指摘した上で、「ヒトと他の動物のコミュニケーション能力の連続性を知るためには、他の動物にコードとしての『言語』(あるいはその類似物)を探すのではなく、むしろ他者の意図を読み取ってコミュニケーションに活かす能力こそを探すべきである」と述べている (cf. 藪田 2010 : 39-40)。人間だけが回帰的な心の読み合い (recursive mind reading) をし、心の理論 (theory of mind) を備え、協力的、社会的、そして利他的な行動をとるという側面がいずれの研究者によっても重視されているのである。

同様の方針は Scott-Phillips (2014) の中にも明確に読み取ることができる。

The cognitive mechanisms that make ostensive-inferential communication possible evolved first for reasons unconnected with communication, but once sufficiently advances they made ostensive communication possible. The creation of conventional codes then followed, as a way to make this new form of communication expressively powerful (Scott-Phillips 2014 : 47).

Scott-Phillips は言語というコードが先にあり、それがコミュニケーションに使われるようになったという一般的な見方を明確に否定している。また、直示的・推論的コミュニケーションを可能にした認知メカニズムもコミュニケーションとは関係なく進化し、後に直示的・推論的コミュニケーションが可能となるように転用されたと考えている。この土台の上に言語が加わることで、現在の複雑な言語コミュニケーションが可能になったというシナリオである。そのため、「なぜ言語が可能になったのか?」という問いではなく、むしろ「言語の進化を可能にした人間固有の(他の霊長類とは機能的に隔絶された、利他的な)コミュニケーションがなぜ可能なのか?」という問いに問題がシフトしていると見ることができる。同様の議論は Tomasello (2008, 2014) などでも展開されている。人間だけが回帰的な心の読み合いが可能であり、他の霊長類が見せる心の理論に近いと思われるものも、人間が見せる心の理論とはまったく異なっていると結論づけている⁶。つまり、議論の焦点は図1における言語以前の段階に集中しており、図1の中央にある言語の発生そのものについては具体的な提案はなされていない。明確に述べられてはいないが、これらの立場は言語を獲得する資質として人間固有のコミュニケーション能力を重視しているだけであり⁷、階層構造を持った言語を生み出す演算能力と

いう、生物言語学が対象としている言語の特徴については何も言及していないのである。

コミュニケーションを重視する立場の主張が前言語段階にとどまっているのであれば、言語の本質的機能に関して生物言語学が「思考の表出」「思考のツール」という側面を強調しても、それは言語発生時点あるいはそれ以降のことであって、言語発生以前の段階に注目し、人間と言語を持たない種のコミュニケーションに見られる連続／断絶を問題にする立場を直接的に批判することにはならない。このように、コミュニケーションの位置づけについて真っ向から対立しているように見える2つの立場だが、実際のところは、お互いを批判しているように見えて、別々の発達段階を問題にしているという決定的なズレがあるのである。

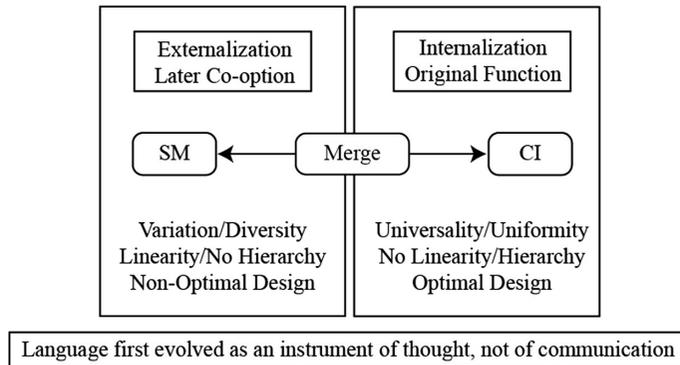
問われなければならないのは、ヒトに固有のコミュニケーションが言語の発生に有利だったのかどうか、そして複雑な言語の発生が、ヒトのその後のコミュニケーションをどのように変えたのかという点である。ヒト固有のコミュニケーションが言語以前に存在し、言語がコミュニケーションをさらに発達させるのに適応的だったのであれば、コミュニケーションの特性が言語の進化上の圧力になっていた可能性は高いと考えることができる。つまり、「言語が可能にしたもの」ではなく、「言語を可能にしたもの」の一部として、ヒト固有のコミュニケーションは位置づけられることになる。逆に、言語の発生以降も、コミュニケーションに本質的な違いがないのであれば、コミュニケーションは本当に独特な意義を持ち合わせていないと理解しなければならない。そして、行動生態学や発達心理学、進化認知科学などの成果を見る限り、ヒトは言語獲得以前からその他の霊長類には不可能なコミュニケーション行動を行っていたと考えることができ、少なくとも言語発生の前駆体の一部として、この社会性や協調性といったものを位置づけることは不可能ではない。

いずれにせよ、現在の議論では前言語コミュニケーションと言語コミュニケーションの間で変化したものとは何なのかという問いに対して正面から取り組んではいないため、言語の発生以前と以後でコミュニケーションにおいて何が異なるのかほとんど明らかにはなっていない。この問題に入る前に、生物言語学における思考の表出システムとしての言語進化のシナリオを概観しておこう。

2.2 生物言語学における進化のシステム

上述のように、生物言語学は、言語によって言語コミュニケーションが可能になったことは当然のこととして受け入れつつ、言語が発生するにあたってコミュニケーションが果たした役割はないとしている。言語は思考の表出システムとして進化したのであり、そのシステムの根幹を成すのは、人間言語に固有の階層構造を可能にする回帰（recursion）という能力である。他の動物では、単なる反復構造の認識は可能であっても、埋め込み（embedding）の認識が不可能であることがその根拠となっている⁸。

生物言語学で想定されている言語能力は図2のようにまとめることができる。

図2 生物言語学における言語＝思考モデル⁹

言語進化の根幹を成す回帰を可能にする演算システムが中央に位置する併合（Merge）である。思考の道具として言語が進化したというとき、何かが前駆体となって併合操作が可能となり、それが概念意図システム（Conceptual Intentional System, 図2のCI）と結びつくことを意味している。概念意図システムは音声として発する以前のものであるため、概念を表す装置としては普遍的・均一的であり、音声化に伴う線状性といった不都合を免れている。そのため、ここでは言語の持つ階層構造がそのまま階層構造として表示され、このシステムは思考を表出するために最適化されていることになる。それ故に、この内在化、内的思考のプロセスこそが言語の本来的機能という位置づけとなる。他方、図の左側は感覚運動システム（Sensorimotor System, 図2のSM）を介する外在化のプロセスである。最適化表示されている思考内容を音声等によって外在化するとき、語順や音声化の方法が個別言語ごとに異なるため、さまざまな変異や多様性を帯びることになり、発生器官の性質上、1音1音を連続で発音するしかない。したがって、内在化された状態では階層的だったものが線状的になり、階層性が失われる。感覚運動システムを介した外在化は言語に本質的ではなく、あくまで二次的なものとされる。

このモデル全体についてはいくつかの疑問がある。そのうち、言語の多様性を過度に小さく見積っているのではないか、意味・概念の普遍性を過度に大きく見積っているのではないか、そして、外在化されていなくても、併合と概念意図システムが結びついた時点で言語として完成しているという想定が果たして可能なかといった点については3節で改めて議論する。ここでは、併合という装置が想定されている点には、コミュニケーションを重視する立場にはない説得力があると考えられるため、進化上の理由も含めて、その説得力の所以を探っておこう。

併合のもっとも単純な形は、2つの要素を取り出し、それらを順序の決まっていない集合にするという操作である。

$$\text{Merge}(\alpha, \beta) = \{\alpha, \beta\}$$

この操作を繰り返していくことで、原理的には無限の階層構造を生成することが可能となる。埋め込みなどの回帰は他の動物が認識できないにも関わらず、人間の言語には普遍的に備わっているため、

これは人間言語にとって必須の能力だと考えられる (cf. Hauser et al. 2002)。

2.1 で扱ったコミュニケーション重視の立場では、言語の統語性や構成性など、複雑な階層構造の発生はほとんど考慮されておらず、コミュニケーション能力が前駆体となって言語が進化したと主張しているだけである。そのため、人間に固有のコミュニケーションから回帰を伴う言語構造が発生するプロセスはまったく明らかになってはいない。この点では、生物言語学の方が説得力のある議論を展開しており (実質的に生物言語学しか具体的な提案をしていない)、その前駆体についても具体的な提案をしている。たとえば Fujita (2009) は、回帰の前駆体として行為文法 (action grammar) を提案している。

行為文法とは図3に見られるような操作である。

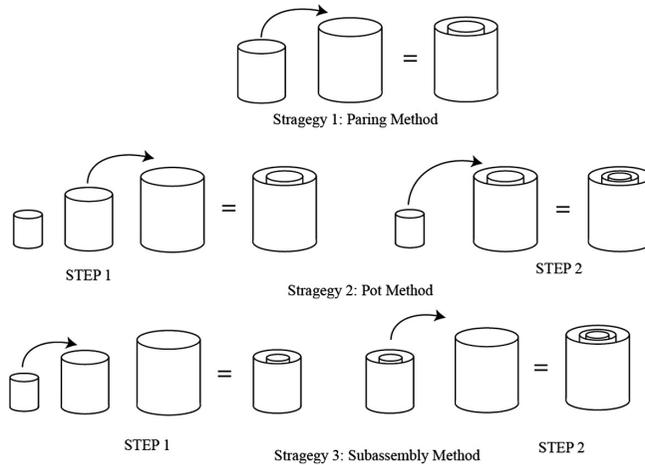


図3 道具操作のレベル (Greenfield 1991: 532 より作成)

行為文法は Greenfield (1991, 1998) によって提唱されたものであり、Fujita は子どもが対象を階層的に操作する (e.g. カップを入れ子型に組み合わせる) 能力が言語に先んじて発達し、それが言語習得の前適応になっていることを提案している。ヒト以外の霊長類でも関連した実験は行われ (cf. Hayashi & Matsuzawa 2003, Matsuzawa 1990)、松沢 (2011) などでも行為文法あるいは道具文法が言語獲得の前駆体である可能性が指摘されている。

ストラテジー 1 から 3 のうち、ヒトの幼児を対象とした研究ではサブアセンブリーの習得が最も遅いことが分かっており、他の霊長類を対象としても、ポット・メソッドにとどまることが通常である。そして、このサブアセンブリーまで使いこなすことと (組み合わせたものを 1 つのチャンクとして扱うことができる能力)、語を組み合わせる句や節、文といった大きな単位を作り出す併合との並行性が Fujita (2009) では指摘されている¹⁰。他の霊長類でもある程度の道具操作は可能であるが、言語を獲得してはいない。人間の道具操作の能力は他の霊長類を越え、そして言語を獲得した。言語の獲得には他の器官の発達なども関係しているためこれだけが理由ではないが、言語構造の回帰を行

為文法に求めるのは非常に説得力のある議論だと言える。

回帰という操作によって複雑な文を生成することが可能になり、それが内在化された領域における思考の醸成にとって根本的に重要な機能だという主張は疑うことができない。それでは、言語進化を考える上で、このような操作的な能力と言語の発生によって、コミュニケーションはどのように変質したのだろうか。言語以前と以後で思考とコミュニケーションはどう変わったと考えられるのか、考察していこう。

2.3 言語によって変化した思考とコミュニケーション

意味論・語用論の研究では、論理学に支えられた意味論研究の方が先に発展し、20世紀半ばに言語行為論が提唱されたことで (cf. Austin 1962)、後の語用論研究が活発になってきたという経緯がある。研究史を辿ると、言語の文字通りの意味ではない意味が発見されてきたかのように思われるかもしれないが、現代の理論で考えられている語用論的な機能のすべてが原始言語で果たされていなかったとは考えにくい。ヒト以外の動物でも「警告を与える」といった、言語によっても可能な行為は行っているからである。ここでは、言語を使っても行い得る行為のうち、言語がなくてもできるものは何なのかという観点から、前言語的思考もしくはコミュニケーションの形を検討してみたい。野澤 (2012) でも同様の方法がとられているが、ここでも発話行為論を軸として、言語的思考と非言語的思考、あるいは言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの違いがどこにあるのかという問題を検討していくことにしたい。

Searle (1975) によれば、発話内行為は次の5種類に大別されている。

- a. 主張型 (assertives) : 提案、仮定、主張、断定など。
- b. 命令型 (directives) : 依頼、嘆願、命令など。
- c. 約束型 (commissives) : 約束、宣誓、制約など。
- d. 表出型 (expressives) : 感謝、謝罪、お祝い、悲嘆、歓迎など。
- e. 宣言型 (declaratives) : 解雇、指名、辞任、洗礼、宣戦など

これらのうち、言語がなければできない行為とは何だろうか。明らかに、(b) の命令型はここには含まれないだろう。ワオキツネザルの警戒音などは命令と理解することもできるし、朝、私がドアを開けて目があつたときにだけ鳴く猫は、私に餌をくれと命令していると解釈することができる (ドアを閉めると鳴かない)。数々の動物コミュニケーションの研究によって、動物にもコミュニケーション行為があることは明らかになっているが、それらは (b) に含まれる行為だと考えることができる。

また、ヒトにおいても、言語を使わずして十分にコミュニケーションが可能である例として挙げられるのは、いつも命令型である。

Having never taught a foreign language, and with no particular desire to learn one, my uncle decided early on in these holidays that the best way to successfully communicate with the shop assistants was to simply

give up on French, and to use other means instead. I joined him on a couple of these trips, and saw this strategy in action. To order bread, he would simply point to the pile of baguettes behind the counter, and then hold up the number of fingers required to indicate how many he wanted. More outlandishly, he would make noise and otherwise impersonate the animal whose meat he wished to buy (Scott-Phillips 2014 : 108).

突然、私はあなたに向かって、図書館ホールの壁に立てかけてある数台の自転車の方向を指さす。あなたの反応は、おそらく「ハァ？」というものだろう。あなたには、私とその状況のどの側面を指示しているのか、またはなぜ私がそのようなことをしているのかがわからない。というのも、指さしそれ自体では何も意味していないからだ。しかし、仮にそれより数日前にあなたがボーイフレンドとひどい別れ方をして、それを私たちは互いに知っていて、その自転車のうちの一台が別れた相手のもので、そのことも私たちは互いに知っているとしよう。するとまったく同じ物質的状况で行われたまったく同じ指さしの身振りが、非常に複雑な内容を意味するかもしれない。例えば「あなたのボーイフレンドが図書館にいる（だから図書館に行くのはよした方がよいかも）」といったように（Tomasello 2008 : 3. 訳文は松井・岩田（2013 : 2-3）にしたがう）。

Scott-Phillips (2014) の例は典型的な命令型の行為だということができる。店と客という立場は最初から明確である。一般的に客は買い物をする意図があることを店側も理解しており、客も売ってくれるものだと思う、さらに店も買ってくれることを期待している。そこに指差しで対象物を指示し、数字をアイコンニックに指で示せば、何を伝達しようとしているのかは言語を介すまでもなく理解可能である。命令の文脈が予め決まっている環境であれば伝達行為は成立するし、物真似をうまくやることができれば超越的な指示も可能である¹¹。Tomasello (2008) の例は少々事情が異なり、背景となっている情報の共有には言語が関与していると考えざるをえないが（注7参照）、指差しの行為が意味するところは、警告のような一種の命令型の行為として理解できる。このように、非言語コミュニケーションの豊かさを示す例として使われる状況は命令型であり、言語を介さずして「昨夜は月夜で美しかった」といった報告が可能だという例は筆者の知る限り皆無である。

これとは反対に、(b) 以外の行為には言語が関与すると考えられる。(a) の主張型は命題が真であることを主張する行為であり、事実の報告などが含まれるため、命題を構築する能力が欠かせない。(d) の表出型は、定義上、他人の発した命題に対する態度である。単なる挨拶行動といった意味での「表出」であれば動物でも観察されるが、ここでは主張された命題に対する真偽の判断などが関与することになるため、言語がなければ不可能である。さらに、(c) の約束型は命題内容が未来において実現することを宣言するものだと解釈することができるため、時空を超越した命題の真偽が問題となる。(e) のうち、命名という行為自体は動物にも可能だと考えられるかもしれない。自分の名前が呼ばれると反応する犬などは、ある特定の音声によって自分が呼ばれていることを認識していると判断できるからである。しかし、自分の名前を認識し、さらには飼い主という個体の認識をしていても、

犬の側から飼い主を特定の鳴き声で呼ぶという行為はないため、命名行為までは行っていないと考えられる。その他の動物についても、「空から襲ってくる捕食者」といったカテゴリに対する警告音があっても、そこから単一の個体を切り分け、その個体専用の音声を用いて命名・指示するには、「敵」や「味方」といったカテゴリ認識ではなく、個体認識が必要となる。言語と個体認識の関係は特に慎重に検討する必要があるため本稿ではこれ以上立ち入らないことにするが、少なくとも動物の世界に固有名詞らしきものはないということは言えるだろう¹²。「XをYと呼ぶ」という命名行為は真偽が問えるようなものではないが、真偽が問題となる命題の構築と同様に、要素を組み合わせることで成立する行為である。

このように検討してみると、表出、約束、宣言、そして主張といった、言語によって可能になる行為の根幹を成しているのは、「命題を構築する」あるいは「命題の真偽を判断する」という能力である。言語を得ることで変わったコミュニケーションや思考とは命題の構築に関わっており、まさに併合操作の結果として可能になったものだと考えることができる。

では、動物が命題を構成することはありえないのだろうか。動物が真偽の判断をする、あるいは嘘をつくということはあるのだろうか。ただ単に事実の報告をするといった行為は、回帰を持たない動物には不可能だろう。少なくとも、言語で言うならば主語と述語で表現されるように行行為者と行為を独立に捉え、一つの文に結びつけて表現する必要があるからである。ミツバチのダンスがエサのある位置や距離を意味している (e.g. エサが南東方向 300 メートルの位置にある)、あるいはワオキツネザルのある種の鳴き声が「捕食者が空にいる」といった、人間言語で言うなら命題の形をとったメッセージであると想定してみよう。これ自体は、意味伝達の基本単位が発話全体あるいは文であると考えれば、まったく不自然なことではない。命題を構成する要素に分割されておらず、一連の分節されていない音声が複雑な、人間言語であれば命題と呼びうる意味を担うという想定である。この問題の核心は、そのメッセージの受信者が真偽を問うという行為が、ヒト以外の動物であっても可能かどうかという点にある。アマゾンに生息しているある種の鳥は猛禽類に対する警戒音を持っているが、実際に猛禽類がいなくてもこの音を発して、餌を争っている異種の鳥を追い払うといったことをするようである (小田 2009: 58)。しかし、命題として理解する、真偽の判断をするというのは、こういった発声行為に対して「この鳴き声は偽だ」といった判断ができるかどうか、その検討をしているような行為が見られるかどうかという問題である。この例で言うならば、発信者の側に立てば「騙そうとしている」と考えることもできるかもしれないが、受信者側で、警戒音を聞いても回避行動を取らないという選択肢はない。したがって、発信側としては単に「追い払う」という命令型の行為を行っているだけだと理解することも十分に可能である。人間言語に置き換えた場合に命題を構成しているように理解できる動物の行動があったとしても、それはおそらく命令型の行為をはみ出しているわけではない。

言語を得ることによって可能となった複雑な思考の産物の1つは、「要素を組み合わせる命題化する」という能力だと言えるだろう。ここから、そのような命題による事実の報告やそれに対する真偽

の判断が適応的となる程度には、言語発生以前の段階から、社会的コミュニケーションそのものが複雑化していたという推測が成り立つ (cf. 野澤 2012)。協力的なコミュニケーション行動は人間を特徴づけるものと考えられているが、信号の真偽や信号の正直さ、あるいは受信して行為を変えることに利益があるかどうか、協力的に振る舞うことに利益があるかどうかといったことを判断するなど、メッセージの真偽判断が意義を持つ程度には社会性があったという見方は行動生態学の知見からも裏付けられる。また、集団行動が行われており、社会的に個々人の役割分担などがあったのであれば、行為者と行為そのものを切り離して認識し、別の行為者と組み合わせて表現することの有効性も理解できる。

最後にもう1点、生物言語学がコミュニケーションを重視しない根拠として挙げることの多い、個別言語はコミュニケーションに最適なデザインとはなっていないという主張も検討しておこう。池内 (2010) や藤田 (2015) では、コミュニケーション上のあいまいさをもたらす構造として、袋小路文や構造的あいまい性、中央埋め込み文などの例が挙げられ、それらを根拠として言語はコミュニケーションに最適化されているわけではないという主張を行っている。確かに、「僕がそれを食べたと思っているワニ」や「豊は菜々子が隆史がごはんを食べたと思ったと言った」(池内 2010: 154-156) といった例は、照応のあいまい性をもたらしたり、端的に理解が難しくなったりと、非常に効率の悪い表現であることは間違いない。しかし、これらの例は本当に言語がコミュニケーションに不向きであることの証拠なのだろうか。これらは実際の発話でまず見聞きすることのない、つまり、コミュニケーション上の障害を避けるためにほとんど使われることはないが、作文することは可能な文である。このような例は回帰によって複雑な構造を生み出すことができる証拠であり、間違いなく潜在的な言語能力の一部を示してはいるが、それがそのままコミュニケーションの重要性を減じることになるとは考えにくい。言語構造として無限の回帰が可能であることと、コミュニケーションを目的とした言語行為はまったくの別次元だからである。

このように検討してみると、言語の発生によって思考もコミュニケーションも変化したのだと理解することができる。言語が発生する前から人間特有のコミュニケーションがあり、回帰による複雑な言語構造が現れた後、コミュニケーション行為自体も変質したと考えることに無理はない。その上、このような形でコミュニケーションの重要性を主張しても、生成文法が主張する言語能力の根幹である併合というアイデアを損ねることにもならない。やはり、「思考かコミュニケーションか」という問い自体がほとんど意味をなさないのである。

なるほど、コミュニケーションだけで回帰に関してまですべてが説明できるというのは誤謬である。Fujita (2009) も指摘するように、統語的操作としての回帰の根源が心の理論であると考えた根拠が I know that you know that I mean that... といった補文の繰り返しでは根拠とはなりそうにない (たとえば Corbalis 2002, Scott-Philippis 2014)。これは言語的な回帰であって、心の理論そのものではないからである。だが、言語の発生によって命題の真偽が問題となるような複雑な言語コミュニケーションが実現し、それが適応的である程度にはヒトに社会性があったのだと考えられるのであれば、「コ

コミュニケーションが果たす独特の意義もない」(Chomsky 2002) と言ってしまうこともまた、誤謬ではないだろうか。

3. 言語進化における外在化の必然性

3.1 人間言語の特徴再訪

Hockett (1960) は人間言語の13の特徴を挙げている。これらすべてを参照するよりも、目下の議論に強く関係するものとして、岡ノ谷 (2009) が Hockett にならってまとめている4つの特徴にならうことにしよう¹³。象徴性、統語性、構成性、超越性という4つの特徴である。象徴性とは、従来の言語学の用語で言えば恣意性であり、概念や事物と記号の間に必然的な関係がないことである。その恣意的な記号が配列のための規則を持っていることが統語性であり、規則に沿って作り上げられた全体は個々の要素の総和以上の概念や事物を指すことができる。これが構成性である。最後に、超越性とは、時間的・空間的な制約を越えた概念や事物を指し、あるいは日常世界には対応物を持たない何らかの意味を伝えることを意味する。言語であるならば、これらの性質を兼ね備えていなければならない。動物におけるある種の鳴き方とメッセージ内容 (= 意味) が一対一対応になっており、その他の鳴き方を作り出すことができないような場合、これら4つの性質はすべて満たされていないと見ることができる。統語性や構成性がないのは明らかであり、物真似によって、その場にいない獣肉の種類を伝えるといった能力がないのであれば、その現場に密着してしか使えないので超越性もない。鳴き声にヴァリエーションがなく、あっても少数の個別の意味に固定されているのであれば、恣意的かどうかも疑わしい。

4つの特徴のうち、人間言語の発生にとって回帰が重要であるとみなす生物言語学は、これら言語の必須の性質のうち、統語性や構成性に関与するものであり、まったく正しいと思われる。併合のようなシステムがなければ統語性も構成性も説明がつかないからであり、その前駆体としての行為文法との関連性は進化上の議論としても適切であることは上述した通りである。その一方で、生物言語学の立場に立つとき、シンタクス (進化の議論においては併合同義) と概念意図システムの間インターフェイスが発生した時点で、それは言語として完成されているという見方には疑問が残る。ここで改めて考え直しておきたいのは、図2のようなシステムに即して言語を捉えるとき、4つの特徴のうち残り2つ、すなわち象徴性や超越性といった、統語論の発生に直接的には関与しないと考えられる性質はいかにして発現するのかという問題である。特に、恣意性という現代言語学の第一原理を捨象するわけにはいかないだろう。換言すれば、感覚運動システムへの出力は二次的なものに過ぎず、社会性やコミュニケーションが本質的ではない場合に、恣意的な記号を獲得することはできるのだろうかという問いである。自然的記号、偶然的記号との対比で提案されたコンディヤック (Condillac 1746) の慣習的記号、現在もその記号分類が一般的に受容されているパースの3分類におけるシンボル (アイコン icon、インデックス index との対比における symbol)、そしてソシユールによる恣意性原理など、指すべき対象と必然的な関係を持たない記号については慣習という社会性が常に要因とし

てあげられてきた。その社会性を二次的なものとし、統語性や構成性のみを生物学的進化として説明しようとするのが生物言語学のモデルであるため、恣意性の発生をどのように扱えば良いのか分からないのである。

最大限に生物言語学の立場を維持するために、ある事物を指すためのアイコンやインデックスから有契性（表される事物との直接的関係）が抜け落ちて慣習的記号になっていったと仮定してみよう。まず、個体 A の中で X という記号が育ち、個体 B の中でも X という記号が発生する。X は表される具体物と有契性があるからこそ、別々の個体の中で、個体間のやりとりを経ずして同じ記号となることも十分にありえる。外在化によってコミュニケーションしようとしたときにも、このシナリオに従う限り問題は発生しないと考えられる。

事実、Berwick & Chomsky (2011) はコミュニケーションを次のように捉えている。

Communication is a more-or-less affair in which the speaker produces external events and hearer seeks to match them as best they can to their own internal resources. [...] Communication relies on shared cognitive powers, succeeding insofar as shared mental constructs, background, concerns, presuppositions, and so on, allow for common perspectives to be (more or less) attained. (Berwick & Chomsky 2011 : 40)

たとえば、「記号 X の発声」という外在化のための出来事があり、聞き手は「X」にできるだけ適合するものを自分の経験の中から探す。本当に同じものを指し、理解しているかは分からないが、確かにコミュニケーションは成立しそうであり、「同じことばを使っても言いたいことが伝わっているとは思えない」といった、逆説的かもしれないが日常的にありふれた現象も、このように考えれば説明可能となるようにも思える。アイコンックまたはインデクシカルな記号であるならば、なおさら誤解が生じる可能性は低いだろう。

問題はここからの過程である。インデックスやアイコンが慣習化され、恣意的な記号となっていく過程にあっても、同じコミュニケーション・モデルが妥当だと言えるのだろうか。言い換えるならば、コミュニケーションを二次的なものとしたまま、あるいはコミュニケーションを介することなく、同じ記号が個体 A と個体 B の中で、同じ速度で恣意性を獲得することはあるのだろうか。上述したような原始的状態であればインデックスやアイコンだけでコミュニケーションを行うことも可能かもしれないが、表そうとする事物が複雑化すれば、事物の間の共通性と差異をうまく捉えた、構造化された記号の発達が必要となりそうである。この過程は、Kirby et al. (2008, 2015) によって「言語の文化的進化」(cultural evolution of language) として描かれている。記号は伝達の中で繰り返し使われることで、複雑さと情報量 (Kirby et al. 2015 では compressivity, expressivity と呼ばれている) が程よいところに落ちつくように構造化されていくというプロセスである。この構造化の過程の中で、具象性を失った記号へと進化していく可能性が高い。つまり、外在化は必須だと考えられるのである。

生物学的進化と文化的進化は別々の側面であり、区別して論じる必要がある。ここでも、決して文

化的進化のみによって言語が発生したと主張しているわけではない。記号にいくつかの段階があることを考慮するとき、より言語らしい恣意性の獲得には、文化的に継承されてきた外在化プロセスが必須であり、内在化と外在化は耐えず繰り返される操作として捉えるべきものだろうという提案である。

3.2 普遍的意味の在り処

外在化が記号を獲得するための必須のプロセスであることを論じるため、生物言語学に関するもう1つの疑問について考えておきたい。個人の内部にしかなくても言語を成立させることができ、外在化したときには他者とやりとりすることもできる概念意図システムとは何なのかという問いである。

外在化と内在化が、かつての生成文法が想定していた、具体的な個別言語を指すE言語 (External language) と、普遍的・抽象的な構造であるI言語 (Internal language) という区別と同じだとするならば、さまざまな不都合が生じそうである。概念意図システムが普遍的で均一な概念というからには、個別言語の語や文によって伝達される具体的な意味が抽象化されたようなものではないはずである。そもそも感覚運動システムは外在化する以外にさして重要な機能を与えられているわけではないため、概念意図システムは感覚運動システムを介して取り込まれるようなものでありえない。

知らないうちに、二次的に過ぎない感覚運動システムを意味の発生装置あるいは取り混み装置として機能しないようにするために取り得る手段は1つしかないと思われる。概念意図システムに含まれるものはすべて普遍的であるという、強力な意味的普遍主義である。あたかも、誰にとっても共通の概念があり、言語能力を持つ人間であればその概念を直観し、記号化・内在化することができるというものである。こう考えるならば、外在化は二次的な操作に過ぎず、コミュニケーションを介することなく同じ意味が共有され、表面的にはどのような言語を使っても問題ないという想定を維持することができる。

しかし、ここまで強力な普遍性を想定するのは極めて難しい。外在化されていないものが本当に他者と共有できているのかを確認すること自体が不可能だからである。あるいは、ウィトゲンシュタインの「Eの感覚表記」のように (Wittgenstein 1953)、個人の中で、ある1つの感覚を1つの記号に結びつけてカレンダーに記述するといった試みは可能なかもしれない。だが、外在化したときに共通の理解が得られるためには、複数の人がまったく同じ孤独なプロセスを経験し、同じ記号を特定の概念に結びつけているという偶然も必要となる。また、実際の言語が使いこなせるようになるためには、自分の感覚はおろか、見ることもできず、直接は感じることもできないような概念まで記号として習得できなければならない。外在化が二次的なプロセスなのであれば、このような記号の共有は難しいだろう。ウィトゲンシュタイン流の意味観に立つ限り、同じ記号を使って同じ概念を指しているという保証がなくとも「同じ使い方をしている」という実践において支えられているのが言語システムである。これには外在化が必須であり、意味的普遍性は使い方を共有している集団内に限定されると譲歩するか、言語以前の真に普遍的だと考えられる思考に限定するしかなくなるはずである。

図2における「内在化」がかつてのI言語と同じ意味ではなく、図2のMergeに相当するFLN(注9参照)に近いものを指すのであれば、やはりすべての人間に共通する普遍的な概念意図を維持するのは難しいと判断せざるを得ないだろう。どのような意図で言語能力が内在化・外在化というプロセスに分かれているのかという問題はさらに検討する必要があるが、ここで論じたように、極端な意味的普遍性の存在、そしてそれが簡単に共有されるという想定は極めて難しい点だけは指摘しておきたい。

3.3 非言語的思考、相対性仮説、あるいは言語多様性を視野に入れて

最後に、普遍的な概念意図の存在が疑わしく、外在化されたイベントが思考にとっても重要であることを論じるために、近年の言語相対性仮説に関する成果や、そこから考えられる非言語的な普遍的思考についても考察を加えておくことにしよう。言語行為論から考えたとき、言語がなくてもできそうな行為としては命令型の行為があった。しかし、非言語的行為やその背後にある思考が、要求や警告といった「他者を動かして利益を得る」ことにとどまるかという点、必ずしもそうではない。すべてを羅列することはできないが、代表的なものを概観しておこう。

言語と思考の関係を扱った研究としてもっとも進んでいるのは言語的な空間表現と空間の認識、そして色彩語彙の有無と色の知覚に関する研究だろう。最終的な結論こそ出ていないけれども、第一言語の影響を強く主張するものもあれば、普遍的な意味があることを論じるものまである。たとえば、空間について Choi & Boweman (1991)、Choi et al. (1999) などでは、英語話者と韓国語話者の間で、ある物体が別の物体の内部に包含されているときに、両者の関係が tight か loose かという点に着目するかどうかという点で違いがあり、言語発達の初期から言語による影響が現れることを主張している。また、Levinson (1996, 2003)、Slobin et al. (2014)、今井 (2010) などでも、言語上の空間指示枠や様態表現が方向感覚や様態の着目点に与える影響や、可算名詞と不可算名詞という言語上の特徴が物体と物質の違いを認識するときに影響を与えることが紹介されている。言語による思考への影響を主張するタイプである。これらの研究に対し、Vandeloise (2003 a, b) では、包含関係 (contenant/contenu) や重力に基づく支持関係 (supporteur/supporté) といった物体間の関係は、言語に関係なく学ばれる複合的な根源的概念 (concept primitif complexe) であるというように、普遍的な思考の存在が主張されている。また、Boweman & Choi (2001) でも、前言語的な空間認識が空間関係を表す語の習得には重要であり、どのような言語の話者であっても空間関係を表す語の習得にはおよそ決まった順序が見られることが報告されている。

近年では、ウォーフ仮説と呼ばれる言語決定論に傾いているような過激な主張はなく、言語による思考への影響の程度や、影響が現れる時期についてはこの分野における研究によってさらに明らかにしていく余地が残されているのは間違いない。しかし、人類普遍的な概念は視覚や重力の体感といった基本的な認知機構に基づくものがほとんどであり、習得した言語によっては、他の言語では注意を向けにくくなるような概念が重視されることも十分にあり得ることを示している。

習得した言語次第で、別の言語では意識されない、少なくとも意識を向けにくくなるような概念が発生するのであれば、いったい何が普遍的な概念意図システムとして内在化されているのだろうか。外界に触れることによって言語は習得され、さらされた言語によって内在化されるものが異なる可能性があるのであれば、真に普遍的なものが何なのか、そのまま外在化して理解できるようなものが何なのかを突き止めなければならない。どのような言語の話者であっても共通する概念はあるかもしれないが、そのような普遍性は根拠のないまま仮定できるようなものではなく、やはり地道に解明すべきものである。

言語進化の問題と言語習得の問題は違うという反論は容易に想定できるため、ここで前もって答えておくことにしよう。人類がはじめて言語を使いはじめたときの最初の1人にとっては、インプットに相当する外在化されたイベントはなかったと考えることができるかもしれない。そのため、感覚運動システムを介して習得される言語習得の問題とはまったく異なるという可能性も否定はできない。だがその立場に立つ限り、内在化されているものは何なのかという問題に加えて、なぜ普遍的な概念意図を外在化させただけに過ぎない音声言語がこれほどのヴァリエーションを持つに至ったのかという問いにも答える必要性が出てくる。このシナリオでは、「最初の1人が獲得した最初の1言語」が想定されるからである。おそらくは、決して単一の言語から分岐した結果として6000語から7000語と言われる多様性に至ったわけではなく、世界中に分散した人類がある時期に、文化集団ごとに異なる記号を発達させていったために多様性が保持されていると見るべきだろう。比較言語学で遡れる限界が5000年程度であるため確たる証拠を挙げることはできないが（したがってこのパラグラフ全体が水かけ論に近い議論になる恐れはあるが）、推定される言語の発生年代（推定10万年前）と出アフリカ（推定180万年前）の時期から考えて、たとえば現在のバントゥー諸語とハカルテック諸語の間に系統的な類縁性があるとは考えにくい。言語を携えて出アフリカが起こり、世界中に広まっていったわけではなく、先に人類の祖先が広まり、各地で言語が発生したと考えることも十分に可能である。最初の1人を想定するのではなく、ある集団の中で外在化を経ながら共同で発達したものだというシナリオは、最初から多様性を前提としているためこれらの問題を免れることができる。

言語の多様性、そして（小さいかもしれないが）それが思考に与える影響を考えると、普遍的で内在化された概念意図というものがどのようなものなのか、ほとんど定かではない。実際の言語使用を離れて、本当にそのようなものが存在しうるのかどうかも分からない。あるとしても、上述したような空間把握に基づく位置関係や重力に基づく物理的原理、命令型に含まれる利己的な行為の背景にある意思など、かなり限られた範囲になるだろう。つまり、外在化させるだけでは決して人間言語にはならないだろうという、始原的概念である。

4. 結論

本稿では、言語進化におけるコミュニケーションの役割を問う、あるいは言語の本質的機能を問うという研究史の文脈において、思考とコミュニケーションのいずれかを重視する立場は、進化の過程

における別々の段階に位置づけられるという主張を行った。対立するかのように見えるこれら2つの立場は、本来は補完的なものと考えべきものであり、一方ではコミュニケーションに思考の複雑さが支えられている面があると考えられ、他方ではコミュニケーション自体も思考が複雑になることによって（＝言語が発生したことによって）変質したことに注意を払わなければならないという主張である。

もう1つの論点は、恣意的な記号の獲得にかかるプロセスおよび普遍的意味の疑わしさから出発し、コミュニケーションあるいは外在化というプロセスは決して二次的なものとは考えられないということである。言語であるためには象徴性、超越性、統語性、構成性という4つの性質すべてを満たす必要があると考えたとき、象徴性を過少評価して成立しているのが現在の生物言語学である。そもそも、生物言語学が統語性と構成性に特化した理論であるのであれば、対象としていない現象まで説明する必要はないため、その仕組み自体に問題はないのかもしれない。しかし、恣意性の自然な獲得や意味の共有といった側面にも配慮するならば、コミュニケーションや外在化、社会性などは言語の本質を構成する部分的要因でなければならない、除外できるものではないはずである。

言語は複雑なシステムである。その機能としての思考であれコミュニケーションであれ、単一の原理だけですべてを説明するのはおそらく不可能である。理論が射程に収めている対象が何なのか、それによって説明できる言語の性質とはどのようなものなのかという、言語学に対する科学哲学的検証が求められているのであり、言語の進化という大きな問題であれば、なおさらそうなのだと考えられる。

注

- 1 本稿は2015年5月30日に行われた日本フランス語学会シンポジウム「言語の進化とコミュニケーション」（司会・提題：守田貴弘、パネリスト：岡ノ谷一夫、藤田耕司）での発表に基づくものである。さらに、この発表時には不十分だった議論を補う上で、早稲田大学文化構想学部酒井智宏ゼミで行った発表が非常に有益だった。ここに記して関係諸氏に感謝申し上げる。
- 2 正確を期すならば、この規定は1876年には廃止されている。廃止されたにも関わらず、現在でもほとんどの言語学者が言語進化の問題に取り組んでいないのは、未だにこれらの問題は科学的に議論することのできない問題であって排除すべきものであると、言語学プロパーの研究者が同意していると捉えることもできる。より詳しくは山内（2012）を参照のこと。
- 3 1996年、エジンバラ大学において第1回が開催されている。学会HP（<http://www.evolang.org>）によれば、人類学、考古学、人工生命学、生物学、認知科学、遺伝学、言語学、モデリング、古生物学、生理学、霊長類学、心理学を含み、またこれらに限定されることのない学際的学会とされている。
- 4 Vyvyan Evans（2014）のように認知言語学の立場から言語進化について発言している人もいるが、大きな潮流となっているわけではない。
- 5 たとえばChomsky自身は原型言語の存在を認めていない。言語の進化が飛躍的に生じたのか、漸進的だったのかという対立があることは確かであるが、この問題は本稿の範囲を越えるため扱わない。

- 6 これらの議論はグライスの語用論 (Grice 1991) と関連性理論 (Sperber & Wilson 1995) に基づきながら、行動生態学や認知科学の知見を取り入れているということができる。
- 7 Tomasello (2014) では具体的な言語の獲得は構文 (construction) の獲得、すなわち「型」の獲得が重要な役割を担うことが提案されてはいるが、これだけでは、2.2節で説明する、生物言語学で問題とされる無限の回帰を説明するには明らかに不十分である。また、Tomasello (2014) は、共有知識や心の理論といった側面の重要性を強調するために、2.3節に引用した例を挙げている。しかし、言語なくして「ひどい別れ方をする」といったことは端的に想像し難く、言語コミュニケーションの上に成立したジェスチャーを過大評価しているのではないかという疑問もある。
- 8 一部の鳥類には回帰の認識が可能だとする説もあるが (cf. Gentner et al 2006)、単なる反復と回帰を明確にすべきだという議論が趨勢である (cf. 藤田 2009、岡ノ谷 2009 など)。
- 9 藤田 (2015) に基づき作成。Hauser et al. (2002) との比較において、この図の全体は広い意味での言語機能 (Faculty of language–broad sense, FLB) に対応し、狭い意味での言語機能 (Faculty of language–narrow sense, FLN) は Merge のみに対応すると考えられる。しかし、FLN と FLB の区分は今でも論争の対象となっているようであり、何を最小かつ根源的な言語ユニットとするかは論者によって異なっている。
- 10 これに加えて、ヒトの言語習得段階が喃語期を経て、1語文、2語文、そして長文を発するようになるというプロセスを考慮するならば、2語文は、主語と動詞、動詞と目的語、所有者と所有物など、さまざまな組み合わせで現れるものではあるが、最も単純なペアリングまでで完結していることも、行為文法とある程度の並行性を示していると解釈できるかもしれない。
- 11 指差し (pointing) は現場指示的であるのに対し、物真似 (pantomiming) は現場を離れた指示が可能である (cf. Tomasello 2014)。言語が超越性を備えるにあたって、物真似やジェスチャーと何らかの共通性がある可能性はある。
- 12 固有名で指示可能な個体指示と、普通名詞で指されるカテゴリの指示のどちらが先かという問題について決定的な答えはない。一般的には、個体指示 (固有名による指示) がより原始的な認識であるといった説が強力なかもしれないが、筆者は、ここで述べた理由により、まったく別の考え方をしている。個体認識は、あるカテゴリの中で1つの個体のみを特別なものと見なす動機が必要であり、場合によっては誕生前から死亡後まで、固有名で個人の名を呼び続ける人間の営みは非常に特殊だとも考えられる (酒井智宏氏との個人談話による)。
- 13 Hockett (1960) が挙げている特徴は the vocal-auditory channel, broad cast transmission and directional reception, rapid fading, interchangeability, total feedback, specialization, semanticity, arbitrariness, discreteness, displacement, productivity, traditional transmission, duality of patterning の13である。

参考文献

- Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*. Cambridge : Harvard University Press.
- Berwick, R. C. 2011. All You Need is Merge : Biology, Computation, and Language from the Bottom Up. In Boeckx, C., and A. M. Di Sciullo (Eds.), 19-41.
- Berwick, R. C., and N. Chomsky. 2011. The Biolinguistic Program : The Current State of its Development. In Boeckx, C. and A. M. Di Sciullo (Eds.), 461-491.
- Boeckx, C. and A. M. Di Sciullo. (Eds.) 2011. *The Biolinguistic Enterprise : New Perspectives on the Evolution and Nature of*

- the Human Language Faculty*. Oxford : Oxford University Press.
- Boweman, M., and S. Choi. 2001. Shaping Meanings for Language : Universal and Language-specific in the Acquisition of Spatial Semantic Categories. In Boweman, M. and S. C. Levinson (Eds.) *Language Acquisition and Conceptual Development*, 475-511, Cambridge : Cambridge University Press.
- Chomsky, N. 2002. *On Nature and Language*. Cambridge : Cambridge University Press. (大石正幸・豊島孝之訳 (2008) 『自然と言語』 研究社)
- Chomsky, N. 2007. Bilingual Explorations : Design, development, evolution. *International Journal of Philosophical Studies* 15 : 1-24.
- Choi, S. & M. Bowerman. 1991. Learning to Express Motion Events in English and Korean : The Influence of Language-specific Lexicalization Patterns. *Cognition* 41 : 83-121.
- Choi, S. L. McDonough, M. Boweman, and J. M. Mandler. 1999. Early Sensitivity to Language-specific Spatial Categories in English and Korean. *Cognitive Development* 14 : 241-268.
- de Condillac, E. B. 1746. *Essai sur l'origine des connaissances humaines*. [œuvre philosophique de Condillac ; volume 1, texte établi et présenté par Georges Le Roy, Paris : Presse Universitaire de France, 1947]
- Corballis, M. C. 2002. *From Hand to Mouth : The Origins of Language*. Princeton : Princeton University Press.
- Elgar, M. A. 1986. House Sparrows Establish Foraging Flocks by Giving Chirrup Calls if the Resources are Divisible. *Animal Behavior* 34 : 169-174.
- Evans, V. 2014. *The Language Myth : Why Language is not an Instinct*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Fujita, K. 2009. A Prospect for Evolutionary Adequacy : Merge and the Evolution and Development of Human Language. *Biolinguistics* 3.2-3 : 128-153.
- Gentner, T., K. M. Fenn, D. Margoliash, and H. C. Nusbaum. 2006. Recursive Syntactic Pattern Learning by Songbirds. *Nature* 440 : 1204-1207.
- Greenfield, P. M. 1991. Language, Tools and Brain : The Ontogeny and Phylogeny of Hierarchically Organized Sequential Behavior. *Behavioral and Brain Sciences* 14 : 531-595.
- Greenfield, P. M. 1998. Language, Tools, and Brain Revisited. *Behavioral and Brain Sciences* 21 : 159-163.
- Grice, H. P. 1991. *Studies in the Way of Words*. Cambridge : Harvard University Press.
- Hauser, M., N. Chomsky, and T. Fitch. 2002. The Faculty of Language : What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve? *Science* 298 : 1569-1579.
- Hayashi, M., and T. Matsuzawa. 2003. Cognitive Development in Object Manipulation by Infant Chimpanzees. *Animal Cognition* 6 : 225-233.
- Hockett, C. 1960. The Origin of Speech. *Scientific American* 203 : 88-111. [Reprinted in S-Y. W. William (Ed.) 1982. *Human Communication : Language and Its Psychological Bases, Reading from Scientific American*, 5-12, San Francisco : W.H. Freeman]
- Kirby, S., M. Tamaritz, H. Cornish, and K. Smith. 2015. Compression and Communication in the Cultural Evolution of Linguistic Structure. *Cognition* 141 : 87-102.
- Kirby, S., H. Cornish, and K. Smith. 2008. Cumulative Cultural Evolution in the Laboratory : An Experimental Approach to the Origins of Structure in Human Language. *PNAS* 105-31 : 10681-10686.
- Levinson, S. C. 1996. Frames of Reference and Molyneux's Question : Crosslinguistic Evidence. In Bloom, P., M. Peterson,

- L. Nadel, and M. Garrett (Eds.) *Language and Space*, 109-169, Cambridge : The MIT Press.
- Levinson, S. C. 2003. *Space in Language and Cognition : Explorations in Cognitive Diversity*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Matsuzawa, T. 1990. Spontaneous Sorting in Human and Chimpanzee. In Parker, S., and K. Gibson (Eds.) *Language and Intelligence in Monkeys and Apes : Comparative Developmental Perspectives*, 451-468, Cambridge : Cambridge University Press.
- McNeill, D. 2008. *Gesture and Thought*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Mehrabian, A. 1971. *Silent Message : Implicit Communication of Emotions and Attitudes*. Belmont : Wadsworth Publishing Company
- Scott-Phillips, 2014. *Speaking Our Minds : Why Human Communication is Different, and How Language Evolved to Make It Special*. Houndmills : Palgrave Macmillan.
- Searle, J. R. 1975. A Taxonomy of Illocutionary Acts. In Günderson, K., (Ed.), *Language, Mind, and Knowledge*, 344-369, Minneapolis : University of Minnesota.
- Slobin, D. I. 1996. From Language and Thought to Thinking for Speaking. In Gumperz, J. J., and S. C. Levinson (Eds.) *Rethinking Linguistic Relativity*, 70-96, Cambridge : Cambridge University Press.
- Slobin, D. I., I. Ibarretxe-Antuñano, A. Kopecka, and A. Majid. 2014. Manners of Human Gait : A Crosslinguistic Event-Naming Study. *Cognitive Linguistics* 25 : 701-741.
- Sperber, D., and D. Wilson. 1995. *Relevance : Communication and Cognition* (2nd edition), Oxford : Blackwell.
- Tomasello, M. 2008. *Origins of Human Communication*. Cambridge : The MIT Press. (松井智子・岩田彩志訳 (2013) 『コミュニケーションの起源を探る』勁草書房)
- Tomasello, M. 2014. *A Natural History of Human Thinking*. Cambridge : Harvard University Press.
- Vandeloise, C. 2003a. Diversité linguistique et cognition. Dans Vandeloise, C. (Éd.) *Langues et cognition*, 19-58, Paris : Lavoisier.
- Vandeloise, C. 2003b. Acquisition des termes spatiaux et relativisme linguistique. Dans Vandeloise, C. (Éd.) *Langues et cognition*, 279-301, Paris : Lavoisier.
- Wittgenstein, L. 1953. *Philosophische Untersuchungen*. Oxford : Basil Blackwell. (藤本隆志訳 (1976) 『哲学探求』大修館書店)。
- 今井むつみ (2010) 『ことばと思考』岩波新書。
- 池内正幸 (編) (2009) 『言語と進化・変化』朝倉書店。
- 池内正幸 (2010) 『ひとのことばの起源と進化』開拓社。
- 岡ノ谷一夫 (2007) 「言語の起源と脳の進化」理化学研究所脳科学総合研究センター (編) 『脳研究の最前線 (上) : 脳の認知と進化』講談社、183-225。
- 岡ノ谷一夫 (2009) 「言語の起源と進化Ⅱ一脳・神経科学の立場から」池内 (編)、71-94。
- 小田亮 (1999) 『サルのことば—比較行動学からみた言語の進化』京都大学学術出版会。
- 小田亮 (2009) 「言語の起源と進化Ⅰ—生態学・行動学の視点から」池内 (編)、50-72。
- 野澤元 (2012) 「行動、認知、社会性に動機づけられた言語—認知言語学と発話行為論の観点から」藤田・岡ノ谷 (編)、95-114。
- 長谷川寿一 (編) (2010) 『言語と生物学』朝倉書店。

- 長谷川信子（2010）「言語の出現を可能にしたヒトに固有の進化」長谷川（編）、149-178.
- 藤田耕司（2009）「言語の起源と進化Ⅲ—生成文法の視点から」池内（編）、93-133.
- 藤田耕司（2012）「統語演算能力と言語能力の進化」藤田・岡ノ谷（編）、55-75.
- 藤田耕司（2015）「言語進化とコミュニケーション」日本フランス語学会 2015 年度シンポジウム発表スライド.
- 藤田耕司・岡ノ谷一夫（編）（2012）『進化言語学の構築—新しい人間科学を目指して』ひつじ書房.
- 松沢哲郎（2011）『想像するちから』岩波書店.
- 守田貴弘（2015）「言語の進化におけるコミュニケーションの問題をめぐって」日本フランス語学会 2015 年度シンポジウム発表スライド.
- 藪田慎司（2010）「動物の信号行動とコミュニケーションの進化」長谷川（編）、12-43.
- 山内肇（2012）「パリ言語学会が禁じた言語起源」藤田・岡ノ谷（編）、35-53.

【Abstract】

Communication and Thought in Language Evolution— Semantic Universals and Linguistic Diversity

Takahiro MORITA*

The aim of this paper is to analyze the claim of biolinguistics (interdisciplinary field dealing with the biology and evolution of language) that the essential function of language is to represent thought. It argues that communication is not a secondary function, but an essential ground for language. More precisely, this paper deals with the following two points. One is to indicate that questions about the essential function of language are, in fact, pseudo problems; the essential function of language is a controversial topic in the literature of language evolution, and there is no agreement between those who insist on communication and the others who advocate representation of thought. This paper tries to show that both functions are considered to have evolved after the emergence of language, and the priority of one of these functions cannot be asked. The other is the role of communication in light of semantic diversity; among several indispensable characteristics of language, biolinguistics may offer a promising theory of syntax. Given arbitrariness or semantic diversity, however, the primacy of communication should not be underestimated.

Keywords : language evolution, (non-) linguistic communication, linguistic thought, linguistic relativity, semantic universals

本稿の目的は、「言語の本質的機能は思考の表出である」とする生物言語学の主張を批判的に検討し、以下2点の分析を通して、コミュニケーションは二次的な機能ではなく、言語を構成する必須要素であることを主張することである。1つは、言語の本質的機能をめぐる問題が疑似問題に過ぎないことである。言語進化に関する研究では、言語の本質的機能をコミュニケーションとする立場と思考の表出とする立場の対立が見られる。だが、コミュニケーションも思考の表出も言語の発生によって変化したと考えられるため、どちらが本質的かという問いはそもそも問うことができない可能性が高い。もう1つは言語の意味的多様性に関わるコミュニケーションの役割である。言語が持つべき必須の性質のうち、構成性や統語性に関して生物言語学は強い説得力を持つが、言語の恣意性や、さらには相対性仮説に代表される、意味的多様性や非言語的な普遍的概念の範囲を考慮するとき、コミュニケーションが二次的ではありえないことを論じる。

キーワード：言語進化、(非)言語的コミュニケーション、言語的思考、意味的普遍性、言語相対性仮説

* A lecturer in the Faculty of Economics, and a member of the Institute of Human Sciences at Toyo University